

令和5年度 全道漁協漁場環境保全研修会

北海道漁業環境保全対策本部

開催日時：令和6年2月20日（火） 9:00～12:00

開催場所：第2水産ビル8F

研修対象：漁業者、漁協職員、漁業関係団体、国、道、市町村、各研究機関他

出席者数：84名（事務局、報道機関除く）

講師：公益財団法人海と渚環境美化・油濁対策機構 専務理事 坂本 幸彦 氏

『海洋プラスチックの現状と、漁業者に求められること』

特定非営利活動法人ブルーカーボン・ネットワーク理事長 枝廣 淳子 氏

『地球温暖化とブルーカーボン』

1. はじめに

北海道の漁業者が直面する漁業環境は、従来からある工場排水や農薬や肥料の流出に加え、近年では、バイオマス発電や洋上風力発電等の新規エネルギー開発、トンネル工事に伴い発生する有害物質含有土砂の受入地問題などの新たな事業の影響が懸念されている。また、世界的には海洋プラスチック汚染、気候変動に伴う水温上昇による各種の影響などが顕在化してきており、問題は多岐にわたってきている。

今年度は、世界的な課題でもある海洋プラスチックや気候変動について理解を深め、今後の漁業の活動に一助となることを目的に研修会を開催した。

2. 研修会の概要

本研修会は、新型コロナウイルス感染防止の制限が解除されたことから、会場での対面開催とした。参加者は、漁協の組合員、役職員を主な対象とし、合わせて水産関連団体、各種研究

機関や水産行政に携わる機関に至るまで、84名が聴講した。

1人目の講演者として、海と渚環境美化・油濁対策機構 坂本氏より、海洋プラスチックの現状と対応についてお話しいただいた。その後、2人目の講師として、ブルーカーボン・ネットワーク 枝廣氏より、地球温暖化やブルーカーボンの取り組みについて、ご講演頂いた。

3. 講演内容

（1）「海洋プラスチックの現状と、漁業者に求められること」 坂本 幸彦 氏

海洋プラスチックは、石油由来の人工物として永遠に残るイメージとともに、海洋生物が死傷した事例の映像が環境団体で使用されていること等から、マイナスイメージを持たれることが多い。漁業系の海洋プラスチックについては、海岸に漂着することで目立ってしまうことや、流出した漁具が長期間ゴーストフィッシングになる等の問題点がある。

世界では年間 1220 万トンものプラスチックごみが海域に流入しており、漁業系は 9.4%、分布場所は海岸 46%、海底 45%、海面 9%である。漁業系海洋プラごみは、日本周辺国では 21%であるが、日本単独では 0.6~2.7%、ここから“漁具もどき”を除くとさらに少なく、実際は人々に持たれているイメージよりもかなり少ない。日本の海岸漂着プラごみの中で、日本の漁業者起源は外海では 3%、内湾・内海では 10~20%となっている。

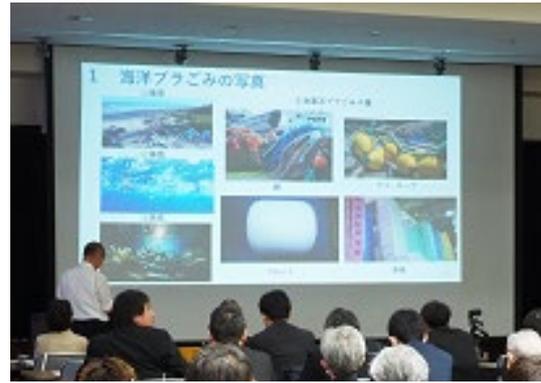
海洋プラごみの国別発生量では、中国が一番多い。マイクロプラスチックについては日本近海が世界平均の 27 倍と高く、周辺国からの流入により日本海域は世界で最もプラごみが多い海域となっている。

これまでの調査研究によって、魚類が摂取したマイクロプラスチックはほとんどが体外に排せつされ、消化管内での溶出量は 1 割以下であるとする結果が得られており、魚体への取込みリスクは低いという重要な知見が明らかになっている。

漁連や漁協で取り組める海洋プラごみ対策として、定期的な海岸清掃、操業中のプラごみ回収と引き取り、漁具の回収・処理及び有効利用の推進や生分解性漁具の採用等が有効である。



坂本氏



坂本氏の講演スライド

(2)「地球温暖化とブルーカーボン」

枝廣 淳子 氏

年々深刻化している地球温暖化を食い止めるためには、地球全体の二酸化炭素排出量を実質ゼロに抑える必要がある。これに加え、すでに大気中に放出されてしまった二酸化炭素を樹木あるいは海草・海藻によって回収し、炭化等によって再び大気に二酸化炭素として放出されないよう固定することが求められている。

地球温暖化の進行によって、著しく気温が上昇し、気象の激化、洪水と干ばつの頻発化がみられている。地球の温暖化が海に与える影響には、海面の上昇、海洋の酸性化、気象パターンの変化、生態系の変化が挙げられ、漁業においては、魚種・漁獲量の変化、水産資源の減少といったかたちで表れている。世界のおよそ 30 億人がタンパク質を水産資源に依存しているとされ、海洋環境の変化が人類に対する世界的なリスクとなっている。

海洋環境が悪化している原因には、気候変動のほか、工事などによる物理的改変や海洋の汚染があり、日本近海においては、いきものすみかの質・規模が劣化し、浅い海における生物多様性、生息範囲が縮小している。海底を覆う海草や海藻がなす藻場は、海のいきものすみかとなるだけでなく、水質を浄化する重要な働きが知られているが、藻場が失われた磯焼けが各地で広がり、漁場の豊かさが失われ続けてい

る。こうした中、注目を集めるのがブルーカーボンである。

ブルーカーボンとは、沿岸浅海域のマングローブ林、塩性湿地、藻場による生態系（以下、ブルーカーボン生態系）が貯蔵する炭素を指し、陸上植物のわずか0.05%しかないブルーカーボン生態系が貯蔵する炭素量は、全陸上植物が貯蔵する炭素量に匹敵するとされる。酸素が豊富な陸域に比べ、酸素の少ない海底や土中に植物体などの有機物が長期にわたって貯留されることから、ブルーカーボン生態系の炭素貯留量が膨大となるためである。海草・海藻による藻場を保全し、これによって増大されるブルーカーボンは、脱炭素社会の実現と海の豊かさを守る切り札となるだろう。

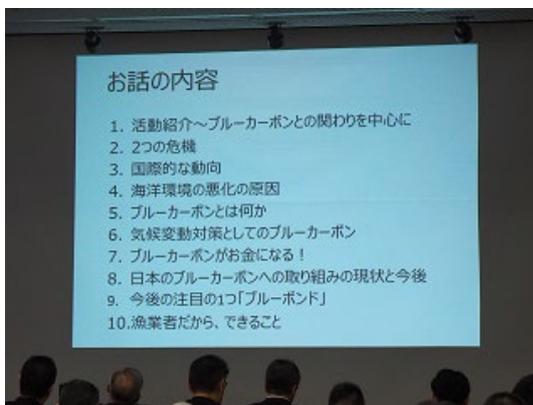
4. 謝辞

講師の坂本氏、枝廣氏には、ご多忙の中、ご講演いただき、大変興味深い講演いただきました。心より感謝申し上げます。

最後に、本研修会の開催に当たり、多大なご協力をいただいた関係者の方々にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。



廣枝氏



廣枝氏の講演スライド